

天皇の巡幸を契機とする埼玉県師範学校に関わる石碑について（その二）

―「鳳翔記光碑」―

薄井俊二 埼玉大学教育学部言語文化講座国語分野

キーワード：埼玉県師範学校、埼玉県女子師範学校、鳳翔記光碑、天皇巡幸、昭和天皇

一 はじめに

埼玉大学教育学部の前身である埼玉県師範学校に関連する二つの石碑「行在所記念之碑」「鳳翔記光碑」がある。いずれも天皇が埼玉へ巡幸した際に、埼玉県師範学校（以下「埼玉師範」と）埼玉県女子師範学校（以下「埼玉女師」）が関わり、それを光栄だとして、記念して作られたものである。碑文としての文学的価値もない、ありふれたものではあるが、当時の現場レベルでの学校や教育の在り方を示す資料として、それなりの価値はあるものと考えている。また碑文は、「行在所記念之碑」は既に何度か活字化されているものの誤写が多く、「鳳翔記光碑」については活字化されたものは管見に及ぶ限りない。その点でも、ここで紹介する意味はあるものと考えている。

本稿は「鳳翔記光碑」について、「翻刻」「訳注」を施し、建碑の経緯や背景について私見を述べるものである⁽¹⁾。

二 概要

昭和九年一月、陸軍特別大演習を閲兵するために、昭和天皇は群馬県に巡幸する。この演習後の観閲式に埼玉師範・女師の生徒が参加した。また、演習から帰還する途上で天皇は埼玉県庁を訪問、埼玉師範・女師や附属小学校の児童生徒らの学業作品等が天覧に浴した。これらのことを光栄だとして作られたのが本石碑。文字は表面のみ。上部に題字が篆書体で書かれ、本文は漢字かな交じりの和文である。裏面に、石工の名が刻まれている。

西山尚志氏の実測によれば、石碑本体の高さ二一八cm、幅八九cm、本文の額は縦一四四・五cm、横七二・五cm、本文の額の上にある題額は縦二四・五cm。石碑を載せる台は、高さ二七cm、幅一四八cm。素材は仙台石。

石碑は現在、埼玉大学大久保キャンパスの、教育学部B棟の東側に立つ。石碑は備品登録されておらず、ただそこにあるだけである。

三 本文翻刻

【表面】

○題字

記光碑（篆書体）

○碑文

鳳翔記光碑

前埼玉縣知事正五位勲四等飯沼一省題額

昭和九年十一月畏クモ

天皇陛下下毛武ノ野ニ武ヲ閲シ給フ是ノ日十七日高崎市乗附練兵場ニ於テ毛武常信越ノ男女生徒青年四萬人ニ親閲ヲ賜ヒ翌十八日本縣ニ行幸アリ神祇ヲ崇クシ民治ヲ察シ名教ヲ厲マシ給フ官民歡喜シテ奉迎ノ誠ヲ效ス此ノ間本校職員生徒兒童或ハ受閲ノ隊ニ伍シ或ハ奉迎ノ列ニ加ハリ或ハ拜謁ノ榮ヲ荷ヒ或ハ成績品ヲ勸覽ニ奉供スルコトヲ得タリ行幸ニ先タツ二日特ニ侍從ヲ本校ニ遣ハシ教育學習ノ實績諸般施設ノ情況ヲ視察セシメ給フ□天恩優渥恐懼措ク能ハス是レヨリ先十月二十五日本校教練査閲ノ事アルヤ近衛師團長朝香宮鳩彦王殿下ノ台臨アリ此ノ日秋霖瀟瀟衣帽ヲ霑スヲモ意トシ給ハス終始臨監アラセラレ特ニ嘉獎ノ辭ヲ賜ハル學校感激ス

惟フニ本校ハ古ク鳳翔閣ト名ツケラレ寵眷ヲ蒙ル事久シ而シテ客秋斯ノ□皇澤ニ浴シ使命弥重キヲ加フ仍テ其ノ梗槩ヲ録シ後昆ニ傳ヘ益奮勵努力以テ□聖旨ニ副ヒ奉ランコトヲ冀フト云爾

昭和十年十一月十六日

埼玉縣師範學校長正五位勲四等有元久五郎撰

埼玉縣師範學校教諭

服部誠一書

【背面】

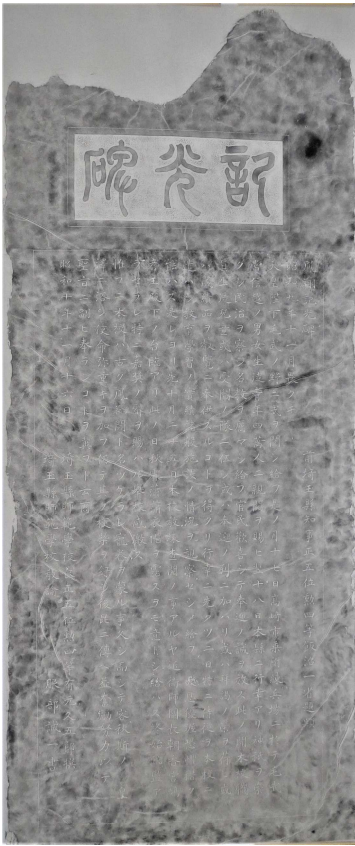
五月女石材店

茂呂仁三郎

図1 石碑全体図



図2 拓本



四 訳注

●本文（文字は旧字体に統一、一行ごとに改行）

鳳翔記光記

前埼玉縣知事正五位勲四等飯沼一省題額

昭和九年十一月、畏^{かしこ}クモ天皇陛下、毛武ノ野ニ武ヲ閲シ給^{たま}フ。

是ノ日十七日、高崎市乗附練兵場ニ於テ、毛武常信越ノ男女生徒

青年四萬人ニ、親閲ヲ賜ヒ、翌十八日、本縣ニ行幸アリ。

神祇^{じんぎ}ヲ崇^{たか}クシ、民治ヲ察シ、名教ヲ厲^{はげ}マシ給フ。

官民歡喜シテ奉迎ノ誠ヲ效^{いた}ス。

此ノ間、本校職員生徒兒童、或ハ受閲ノ隊ニ伍シ、或ハ奉迎ノ列ニ加ハリ、或ハ拜謁ノ榮ヲ荷ヒ、或ハ成績品ヲ勸覽ニ奉供スルコトヲ得タリ。

行幸ニ先ダツ二日、特ニ侍從ヲ本校ニ遣ハシ、教育學習ノ實績、諸般施設ノ情況ヲ視察セシメ給フ。

天恩優渥、恐懼措ク能ハズ。

是レヨリ先、十月二十五日、本校教練査閲ノ事アルヤ、近衛師團

長朝香宮嶋^{やすひこ}彦王殿下ノ台臨アリ。

此ノ日、秋霖瀟瀟、衣帽ヲ霑^{うるほ}スヲモ、意トシ給ハズ、終始臨監

アラセラレ、特ニ嘉獎ノ辭ヲ賜ハル。

舉校感激ス。

惟フニ、本校ハ、古ク鳳翔閣ト名ヅケラレ、寵眷ヲ蒙ル事久シ。

而シテ客秋斯ノ皇澤ニ浴シ、使命^{いよいよ}弥^{いよいよ}重キヲ加フ。

仍テ其ノ梗槩ヲ録シ、後昆ニ傳ヘ、益^{ますます}奮勵努力以テ聖旨ニ副

ヒ奉ランコトヲ冀フト云爾。

昭和十年十一月十六日

埼玉縣師範學校校長正五位勲四等 有元久五郎撰

埼玉縣師範學校教諭 服部誠一書

●語注

○飯沼一省 第三一代埼玉県知事。後述。

○天皇陛下 昭和天皇。後述。

○畏クモ 口にするのも恐れ多いことに。おそれおおくも。

○毛武 上野と武蔵。今の群馬県と埼玉県。演習が行われたのは群馬県であるが、ここでは埼玉県も併称している。

○乗附練兵場 明治一七（一八八四）年の歩兵連隊制により、歩兵第十五連隊が高崎城跡に設置され、高崎市街西部にあたる乗附一帯が演習場として活用され、乗附練兵場と呼ばれた。

○毛武常信越 両毛（群馬県、栃木県）、武蔵（埼玉県）、常陸（茨城県）、信濃（長野県）、越後（新潟県）。

○親閲 天子が親しく兵馬等を閲覧すること。

○神祇 天の神と地の神。天神地祇。「尚書」湯誥に「竝告無辜于上下神祇（並びに無辜を上下の神祇に告ぐ）」とある。

○民治 人民の治まること、民を治める政治。「礼記」楽記に「仁以愛之、義以正之、如此則民治行矣（仁以て之を愛し、義以て之を正す、此の如くなれば則ち民治行はる）」とある。

○名教 名分に関する教え。道德上の教え。人倫の教え。なお、埼玉県庁において、飯沼知事が天皇に捧呈した上表文⁽²⁾に「神祇ヲ尊クシ民情ヲ察シ名教ヲ勵マシ」とある。この三点をならべ

るのは常套句なのであろう。

○奉迎 身分の高い人や君主をお迎えする。

○效 効に同じ。力をつくす。

○受閲ノ隊ニ伍シ 受閲は閲兵を受ける。伍は、隊列。隊伍で、同列に列ぶ。

○叡覽ニ奉供ス 叡覽は天子の閲覧。奉供は、捧げ供える。

○侍従 このとき埼玉師範・女師に派遣されたのは、侍従の永積寅彦。後述。

○天恩 天子の恩恵、聖恩。

○優渥 雨水が十分にあるさま。（ほうびや待遇が）手厚いさま。なお、飯沼知事の上表文⁽²⁾に「皇恩優渥黎民ヲ潤シタマヒ」とある。

○措ク能ハス してやまない。

○教練 戦前の学校で施行した軍事教育の学科。

○査閲 調べ見る。検査、察看。

○朝香宮鳩彦王 皇族で近衛師団長であった。後述。

○台臨 台は、尊称。

○秋霖 秋の長雨。

○瀟瀟 雨風の激しい様。

○意トシ 気にかける、心配する。

○臨監 その場で監察する。

○嘉獎 ほめて奨励する。

○學校 学校あげて。

○寵眷 かわいがる、御氣に入る。寵顧。「国史略」欽明天皇に「帝……輒以爲近侍、寵眷日渥、賞賚甚夥（帝……輒ち以て近侍

となし、寵眷日に渥く、賞賚甚だ夥し」とある。

○客秋 一回前の秋。

○後昆 子孫、後世。「尚書」仲虺之誥に「王懋昭大德、建中于民、以義制事、以禮制心、垂裕後昆（王 懋めて大德を 昭らかにし、中を民に建て、義を以て事を制し、禮を以て心を制し、裕を後昆に垂れよ）」とある。

○聖旨 天子の意向、命令。

○副フ かなう、適合する。

○有元久五郎 当時、埼玉師範学校校長。後述。

○服部誠一 当時、埼玉師範学校教諭。後述。

●人物

○飯沼 一省 いぬま かずみ 明治二五（一八九二）年から昭和五七（一九八

二）年。会津若松市生まれ。父は会津松平家令飯沼関彌。大正六（一九一七）年に東京帝国大学を卒業。以後内務官僚の道を歩み、昭和九（一九三四）年七月一〇日に第三一代埼玉県知事に就任。陸軍特別大演習の通達は、同年二月二七日に廣瀬久忠前知事に下っており、県として準備に着手していたが、新任知事は、大演習の準備と実行に忙殺されることとなった。無事大演習を終え、翌一〇（一九三五）年五月には知事の任を離れた。「鳳翔記光碑」の建立は、同年一月で、知事は齋藤樹であったが、実際に大演習に対応した飯沼が題額を委ねられたのであろう。

○昭和天皇 名は裕仁 ひろひと、幼名は迪 みちのみや 宮。明治三四（一九〇一）年から昭和六四（一九八九）年。在位は、同元（一九二六）年から。大正天皇の第一子。大正元（一九一二）立太子、同一〇（一九

九二一）から摂政。大演習の同九年は、満三三歳であった。

○永積 寅彦 ながづみ とらひこ 明治三五（一九〇二）生。陸軍大将大迫尚道の三男。昭和天皇のご学友として学習院や東宮御学問所とともにした。天皇即位後は、昭和五二（一九七七）年に退職するまで、一貫して侍従として仕えた。著に『昭和天皇と私…八十年間お側に仕えて』（学習研究社、一九九二）がある。

○朝香 宮嶋 彦王 あさかのみややすひこおう 明治二〇（一八八七）年から昭和五六（一九八一）年。久邇宮朝彦の八男。明治三九（一九〇六）年、朝香宮の称号を受け、宮家を創設。大正三（一九一四）年、陸軍大学校を卒業。昭和一四（一九三九）年に陸軍大将。宮將軍として、日本各地で視察査察を行っていた。

○有元 久五郎 ありもと きゆうごろう 明治八（一八七五）年から昭和三八（一九六三）年。岡山県出身。岡山県師範学校を卒業して教員生活に入り、明治三六（一九〇三）年四月に埼玉師範学校物理化学科教諭兼訓導として赴任。同三八（一九〇五）年一月までつとめた。以後和歌山県立師範学校長等を歴任し、昭和七（一九三二）年、今度は学校長として埼玉師範に赴任した。

○服部 誠一 はつとり せいいち 号は北蓮。明治三二（一八九九）年から昭和六一（一九八六）年。現杉戸町生まれ。大正一〇（一九二一）年、埼玉師範本科一部を卒業。教員生活に入り、昭和五（一九三〇）年に埼玉師範に赴任。新制埼玉大学教育学部となった同二四（一九四九）年から退官の同四〇（一九六五）年まで教授。埼玉大学大久保キャンパスの三人の学校長胸像解説文や浦和東和銀行前の「埼玉県師範学校埼玉県医学校発祥之地」碑文も服部の手になる。

○五月女石材店、茂呂仁三郎、會田治郎吉 いずれも不詳。

●口語訳

鳳翔記光記

前の埼玉縣知事正五位勲四等飯沼一省による題額。

【陸軍大演習と青少年の閲覧】

昭和九年十一月、恐れ多くも、天皇陛下にあらせられては、群馬県埼玉県の野において、陸軍の大演習を視察され、皇軍を閲兵された。この閲兵が行われた後の一七日、高崎市乗附練兵場において、群馬・栃木・埼玉・茨城・長野・新潟六県の男女生徒青年四万人に対し、親しく閲覧することの榮譽を給い、さらに翌一八日に、本県へ行幸された。

【埼玉県への行幸】

氷川神社において神々をあがめられ、本県の民を治める政治を視察なさり、さらに人倫・道徳上の教え、教育を励まされた。官民ともに歡喜して陛下をお迎え奉るまごころをつくしたのであった。

【埼玉師範・女子師範の榮譽】

この間、本校の職員生徒児童は、あるものは閲覧を受ける隊列に列び、あるものは陛下をお迎えたてまつる列に加わり、あるものは親しく拝謁する榮譽を受け、あるものは自ら制作した成績品を閲覧していただくために捧げ供えることができた。

【侍従の差遣】

行幸に先立つ二日前の一六日には、特段の恩恵により侍従を本校に差し遣わし、教育學習の実情成績、もろもろの施設の情況などを視察させられたのであった。天子の恩恵の手厚さに、恐れかしこまってやまない次第である。

【朝香宮の台臨】

さらにこれに先立つ一〇月二五日、本校の軍事教練を査閲することになり、恐れ多くも近衛師団長朝香宮鳩彦王殿下の台臨をいただいた。

この日は、秋雨が激しく降りしきる悪天候であったが、衣服や制帽が濡れそぼつこともお気になさることはなく、終始直接臨場して監督を続けられ、さらに特別におほめの言葉を賜った。学校あげて感激した次第である。

【埼玉師範と鳳翔閣】

思うに、本校は、明治十一年には天子の行在所となる榮譽を受け、鳳翔閣と名づけられ、以後天子からの特別の恩寵を被ることが久しかった（天皇からの期待が高いものであった）。

【埼玉師範の使命】

そして、昨年の秋に至って、右記に述べたようなさまざまな天子の恩沢をいただくことになり、教育に携わるといふ我が校の使命はいよいよ重いものであることを更に自覚するに至った。

【建碑の目的】

そこで、この間の経緯や事象について概略を記録し、後世に伝え、後の者達が、ますます使命に向かって奮励努力し、教育を重要視するといふ天子の御心にかないたてまつるものとなることを、心より願ってやまないものである。

【署名】

昭和十年十一月十六日

埼玉県師範学校校長、正五位勲四等、有元久五郎、文を撰す。

埼玉県師範学校教諭、服部誠一、書す。

五 解説

五―一 碑名について

本石碑の名前について、題字には「記光碑」とのみ記すが、碑文の題名は「鳳翔記光碑」とある。こゝちらが正式名称で、題字は、文字の配置の関係で、省略したものと考える。

五―二 碑文の内容と構成

碑文は、先ず昭和九年の陸軍大演習とそれに続く埼玉への行幸を記し、埼玉師範・女師とその附属小学校がその演習と行幸に様々な形で関わることができたことを光栄なことだと述べる。

さらに行幸に先立つ二日、埼玉師範と埼玉女師に勅使の来臨を賜ったこと、さらに一ヶ月前に、朝香宮鳩彦王の台覧を受けたことを、栄誉あることとして述べ、最後に三〇年前、校舎を行在所として供するという栄誉を受けたことを指摘する。現在から遡って、過去において天皇からの栄誉を受け続けてきたことを記述し、ゆき、過去の最大の栄誉であった鳳翔閣にまで至って、再び現在へ立ち戻る。埼玉師範・女師が、天皇からの恩沢を受けるという「光栄の歴史」を記していると言えよう。

それを踏まえ、天皇が重要視する「教育教化」に対し、埼玉師範・女師は期待されており、自らも使命と考えるべきだという。そしてそのことを文章に書き付け、碑文に残すことによって、埼玉師範・女師の教職員生徒たちをはじめとする人々に永遠に伝え、天子の心にかなうものになるよう期待して文を結ぶ。

埼玉師範の生徒会に相当する「共攻会」発行の雑誌「鳳翔」第三八号（一九三五）^{（3）}は「光栄記念號」と題され、大演習での親閲と行幸、勅使差遣、朝香宮台覧を「光栄」と捉え、その記録と生徒感想文を掲載する。この号の有元学校長の「巻頭言」は、この碑文とほぼ同趣旨である。

また埼玉女師の生徒会に相当する「校友会」発行の雑誌「蒼穹」第五号（一九三五）も大演習に関する記念号的性格のものである^{（4）}。学校長辻助次郎の「巻頭言」は「光栄の昭和九年」と題し、行幸・勅使差遣を光栄とした上で「天皇陛下の御親閲を拜受した際……奉唱しました歌は我が校五年生藤原能婦子の謹作した歌詞でありまして、右六縣下にて當局の募集に應じた多数の作品中より當選したものであります」と誇らしげに述べている。

碑題のうち「鳳翔」は埼玉師範の別称「鳳翔閣」であり、「記光」は、「光栄を記録する」の意であろう。

五―三 昭和九年陸軍大演習と埼玉師範・女師

次に、碑文建立の直接の契機となった、昭和九年の陸軍大演習とそれに対する埼玉師範・女師の関わりについて見てみる。

（一）大演習の概要

①行幸の目的

原武史は、近代の天皇や皇太子の行幸・行啓を五段階に分けた^{（5）}。そのうち明治五（一八七二）から同二三（一八九〇）までの第三段階では、天皇が政府高官をつき従えて、地方を巡幸していた、とする。「巡幸の目的は、天皇という新しい支配者が、それぞれの地方の民情を実地に視察すること」であったが、「人々

もまた、等身大の天皇を見ていたのであり」「双方が、見る―見られるの関係にあった」。前稿（注1）で扱った明治十一年の浦和行幸もこの性格を帯びていた。

そして、明治二三（一九八〇）年からの第四段階では、それまで同様の「巡幸」にあわせて、陸海軍特別大演習の統監という軍事的な目的が加わるとする。昭和九年の巡幸も、北関東で行われた陸軍特別大演習を契機とするものであった。

②大演習の意味するもの

大演習そのものは、陸軍兵士による軍事演習であり、天皇は大元帥としてそれを統監した。しかし兵士以外の若者や一般庶民たちも様々な形でこのイベントに参加した。

大演習に付随して、生徒青年といった将来の兵士達による隊列行進や、女子達による歌の奉迎が行われた。大演習終了後は、天皇は各地域を行幸し、役所や企業・学校等を訪問した。人々は、仕事ぶりや授業を参観してもらうこと、製品や成績品を閲覧に呈すること、沿道で奉送迎すること等を通して、行幸に参加した。

演習以後の行幸も含めた一切の事業が終了すると、各自自治体は、写真集や絵葉書といった記念の印刷物を発行するが、あわせて大演習に関わったあらゆる取り組みや事象を本の形でまとめている。昭和九年の大演習では、埼玉県による「昭和九年陸軍特別大演習並地方行幸埼玉縣記録」がある²²。B5版で、写真四四頁、本文六九六頁に及ぶ大冊である。同様のものが、群馬県・栃木県・前橋市・高崎市・桐生市・足利市でも作成された。こうした記録集を作り、残すこと、さらにはそれを購入したり眺めたりすることも、天皇行幸へ参加する一つの方法であったといえる。

（二）大演習への埼玉師範・女師の関わり

「鳳翔記光碑」は、「本校職員生徒児童」の関わり方として「受関ノ隊ニ伍シ」「奉迎ノ列ニ加ハリ」「拜謁ノ榮ヲ荷ヒ」「成績品ヲ覧ニ奉供ス」の四点をあげている。それぞれについて「大演習埼玉記録」及び参加した生徒の記録により、内容を確認する。

①受関

大演習そのものは、一月一日から三日までの三日間で、一四日が観兵式。一五日から行幸で、一七日の午後が乗附練兵場における「男女青年代表諸団体御親閲」（図3）。一部の男子生徒は、前日から現場に乗り込んで野営して当日を待った（図4）。

a 準備

（一六日）

- ・ 午前七時五〇分 浦和駅出発
- ・ 一一時二〇分 高崎駅到着
- ・ 野営地到着、野営準備 埼玉師範は第一中隊
- ・ 午後五時 朝香宮鳩彦王殿下台覧
- ・ 七時 侍従徳大寺実厚、御差遣
- ・ 九時 消灯

（一七日）

- ・ 午前八時 乗附練兵場集合

b 親閲次第（『は大演習埼玉記録』のコメント）

○午後二時三〇分から三時二〇分の間
・ 御親閲…天皇来場
『陸軍々楽隊の莊重なる「君ガ代」の奏樂のある中に聖上陛下には式場正門より御召自動車輕やかに臨御あらせらる』

・分列…男子生徒ら分列行進、天皇挙手、集団名紹介、天皇点頭
『御英姿を目のあたり拝し奉る光榮に胸打ち鳴らさむ者としては無し』

天皇挙手

『一同の感激極度に達せり』

天皇点頭

『まことにもつたいなき極みなり』

・奉迎歌奉唱…女子生徒奉迎歌「菊の香の妙なるこの日」奉唱

『此の時一同は既に感激の高調に達し眼底を潤さざる者無き有様なりき』

・天皇旗、御英姿拝謁

『四萬三千有餘の若人利那の感激は、やがて永遠の感銘へと転じ、美しき君民一體の境は直に國を固むるの礎とはなれり』

・君ガ代奉唱

・萬歳三唱

c 後始末

(一八日)

・野營地撤収

・午前九時 野營本部前で解散式

・帰校の途につく

d 生徒らの参加形態と師範・女師の参加

・中等学校生徒一万五千人 野營(含、師範生徒)

・青年訓練所生徒及其他二万八千人 当日参加

・師範は、当初割当七四人、実際九五人

・女師は、当初割当三六人 実際四〇人(他に引率四人)

図3 受閲の様(大演習埼玉記録「図7まで」 分列行進

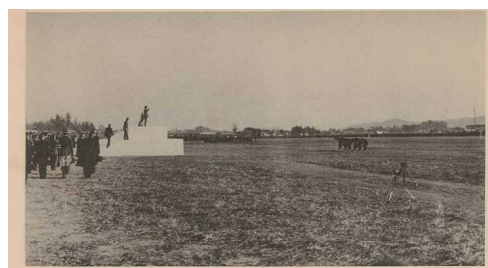


図4 野營の様



e 参加者の言

・有元久五郎学校長（「鳳翔」巻頭言）

「本校よりは職員生徒九十五名、學校を代表して分列部隊に参加し、本縣集團の最先頭最右翼に立ちて全集團をリードして歩武堂々分列行進をなし、咫尺の間に御親閲を仰ぎ余も亦陪觀の光榮に浴したる事は、實に永久に忘るることの出来ない感激である。」

・二部二年田口眞一郎（「鳳翔」「御親閲拜受の記」）

「十一月十六日 晴。何處までか高く澄渡つた晩秋の天空、明るく澄んだ日の光。御親閲拜受の光榮に躍る鳳翔閣の若人四百人の輝かしい門出だ。凜々しい武装に身を固めて、誰も彼も皆溢れる様な元氣である。……おお初めて拜す□陛下の御英姿。畏さに胸とどろき曇る目を如何ともすることも出来ないのだ。……女子奉唱隊の奉迎歌奉唱が始まる。……微塵も御動きあらせずこの民草の歌に、ひたすら御耳を傾け給ふ御姿の畏さよ。次いで全員君が代の奉唱。歌ひ終れば今は感激の極まり幾萬の民草が唱へ奉る「天皇陛下萬歳」絶呼である。銃をかざして叫べばいつか泪は双頬を傳ひ、体は興奮に顫へて還御あらせたことも知らなかった。」

「鳳翔」第三八号は、他に専攻科浅海公平以下八名の感想文を収録する。

・師範五年藤原能婦子（「蒼穹」「御親閲奉唱歌に當選して」）

「昨秋十一月十七日高崎乗附練兵場で行はれる御親閲の際の奉唱歌を豫て募集してゐる事も知らなかった私が、偶然の機會から當選に浴する事が出来、只感激の外はない。……ああ□陛下の御前で夢中に此の歌を奉唱申し上げた時は、只感激の二字に盡くされる心持ちだけであつた。上毛の野に立ち、緊張と感激の外何もの

もなかった其一日、それは私に取つて忘れられぬ光榮として、思ひ出す毎に新たな感激となつて、永遠に波うち躍動していくであらう。」

②奉迎

天皇をお迎えする奉送迎は、「県庁構内」などの「特別奉送迎場所」は、指定された特別の者だけが対象で、一般人は「団体奉送迎場所」である「通過沿道」等で、団体で参加した。

埼玉師範・女師関係者は、一八日午前の、氷川神社から埼玉県庁に至る沿道での奉迎を担当し、新国道（現在の十七号）の与野から浦和市第二小学校^⑥までの区間に割り当てられた。埼玉女師生徒二六九名と附属小児童二四三名は道路の西側に、埼玉師範生徒二七八名と附属小児童四六七名は道路の東側に配置された。

奉迎者は午前九時には会場に入場して待機。天皇の氷川神社出発が午前一一時五分で、県庁到着が午前一一時三〇分。その間二五分を自動車で移動する姿を沿道から奉迎した。

「鳳翔」第三八号には、奉迎に関する感想文を十篇掲載する。

・専攻科中村義夫「聖駕を拜して」

「空高く菊の香空にみち響る秋の十一月十八日、今日ぞ我等の浦和市に畏くも聖駕を御迎へすることの出来る日である。老も若きも千載一遇のこの奉迎を待ちに待った佳き日である。……十一時三十分。御先導の自動車が通ると、天地は唯靜寂そのものに靜つた。我等は赤誠こめて一重に陛下の御心に捧げ、誠を籠めて最敬禮をなし、恭しく頭をあぐれば、聖駕今や目のあたりに御通御、陛下は畏くも舉手の御答禮を下されてゐ磐石の如く泰然としかも御慈愛に充ちた御健やかな御姿を拜した時、唯わけもなく目頭の

あつくなるのをどうすることも出来なかつた。」

・高女一年木村貴和子

「あまりにも間近におわすその御英姿。ああ！何と有り難い事ぞ！何と勿體ない事ぞ！自然眼が曇つた。その眼に、勿體ない玉體が、はつきりと拜されたのだ。……道も木も、皆感激に満ちて、活々と光を發し、何とも言ひやうのないこの神々しい様子。次第に遠ざかり行く御車。聖天子上に戴き、いやが上にも榮え行く我が國。その都近くに生活する私達。おお！日が、その御車に照り映えてゐるではないか。」

奉迎をした光榮を美辭麗句で飾っている。

師範生徒と師範附属小児童は、東側の最も南、すなわち最後の場所まで奉迎していたせいか、「大演習埼玉記録」の写真の部において、その姿が掲載されている(図5、6)。天皇通過のかなり前であるが、児童達は真剣な面持ちで姿勢を正している。それに対し、師範の生徒はリラックスした様子で、白い歯を見せている者や、ポケットに手をつっこんでいる者もいる。先の中村君や木村さんの文章が建前だとすれば、この写真の生徒達の姿は彼等の本音を表しているのだろう。

③ 拝謁

天皇に直接面会する拝謁は、埼玉県庁において、一月二八日、午前一一時三〇分から正午までの間に次の行事が行われた。

- ・ 拝謁…知事
- ・ 上表文捧呈…知事、県会議長、浦和市長、浦和県会議長
- ・ 県治奏上…知事

図5 奉迎 児童



図6 奉迎 生徒



・ 賜閱(単独拝謁) 午前一一時四五分ごろ

・ 賜閱(列立拝謁) 正午ごろから

単独拝謁は、一人で拝謁するもの。「従四位以上」などの資格があり、浦和高等学校校長以下一〇二名が、順次拝謁室に入室して拝謁した。列立拝謁は、あらかじめ列んでおき、天皇が入場してから全員で一斉に拝謁する。構内中庭にて、浦和地方裁判所検事以下四七七名が拝謁した。

埼玉師範・女師関係者では、有元久五郎師範学校校長と辻助次郎女子師範学校校長ら九名が列立拝謁に加わっている(7)。

④ 成績品観覧

埼玉県学芸部より、県下の児童生徒教職員に対し、学芸成績品

と研究創作品を作成して出品するよう通知がだされ、多くの作品が出品された。それらは予選本選を経て、一〇一八点が選ばれた。

第一室は小学校児童の「書方、図画、手工」の作品、並びに尾間木小学校教諭の手になる「見沼通船堀模型」、六辻小学校教諭の手になる「埼玉県地理模型」、第二室は公民学校生徒の「書方、図画、手工実習成績品手芸及裁縫」の作品並びに鉢形小学校教諭の手になる「鉢形城址模型」、第三室は中等学校生徒の「習字、図画、手工実習成績品手芸及裁縫」の作品と教職員青年団員の研究創作品、並びに富岡小学校教諭による「三富開墾遺蹟模型」等が、それぞれ陳列された。

埼玉師範・女師の関係では、附属小から五名、師範・女師から八名と一グループ、教員が一名、それぞれ作品を展示した。

天覧は、一八日の午後。当日のスケジュールは次の通り。

○午後零時五〇分 昼食終了

・県下物産天覧

・学芸品天覧

・献上品天覧

○小休憩

○午後一時五〇分 県庁出発

一時間に満たない時間で、三種類の展示場を回ったことになる。天皇の県庁出発後は、展示場は一定の者に拝観を許し、一九・二〇日は一般公開された。

図7 教師製作品（「鳳翔」三八より）



図8 成績品（「鳳翔」三八より）



有元師範学校長は、「鳳翔」巻頭言で次のように述べている。

「本校生徒児童學業成績品並に職員研究物をも天覽有り、就中萩原教諭の蒐集になれる本縣秩父産化石には特に長時間御目を留めさせられ、又前田教諭及ある^マ會員製作にかゝる本縣模型は、飯沼知事の本縣水利墾田状況奏上説明の用に供せられ、是又親しく天覽を辱うしたる等、眞に重ね重ね光榮至極で感激措く能はざる所である。」

以上、鳳翔記光碑に記す「受閲」「奉迎」「拝謁」「叡覽」は、いずれも埼玉師範・女師の児童生徒教職員が実際に関わったものであり、碑文の言葉は修辭で用いられたものではないことが確認される。

(三) 一六日の侍従差遣

碑文は、天皇の浦和行幸に先立つこと二日の一月一六日、侍従が勅使として埼玉師範と女師に差し遣わされたことを、光榮の一つとして記す。この差遣についても検討しておく。

天皇の行幸の際には、本人ではなく侍従などが勅使として、いわば代理として派遣され視察を行った。そして代理を通して、視察内容は天皇に届くというのが建前であった⁽⁸⁾。

昭和九年の行幸においても、各地で差遣が派遣されたが、埼玉県では、埼玉師範と埼玉女師を含む二〇箇所が対象となった。

① 埼玉女師への差遣

「百年史」では埼玉女師の項で、「軍部と国民との一体感を生み出すことをもめざしていた」という特別大演習そのものの性格

を説きながら、記光碑にもいう「受閲」「行幸と奉迎」「勅使御差遣」を通して、「この年秋の女師は、陸軍大演習一色にぬりつぶされた感がある。軍国主義への歩みがたどられていた段階で、学校教育をそれに確実にくみこむために、この大演習が最大限に活用されたように思われる」と記す。

辻女師学校長は「蒼穹」巻頭言で次のように言う。
「當校として□勅使をお迎へ申上げた事は、遠く開校以來未曾有の光榮でありまして、本校史上永遠に遺すべき譽であります。」

具体的な埼玉女師への派遣は午前一〇時五〇分から一一時二〇分までの三〇分間であり「県への状況報告と見られる文書」を紹介して、視察の具体的な内容が次のものであったと記す。

- 一 門前奉迎 女師・附属の高学年を中心に奉迎
- 一 概況御説明 学校長による学校沿革と現況説明
- 一 御使校内御巡覽 授業參觀と本校教諭への質問等
- 一 門前奉送 奉送後、全生徒児童へ学校長より訓示

「校内御巡覽」について、「蒼穹」所収の「御使奉迎記（犬丸勝良教諭）」は「地歴教室にて一部二年の地理科授業、次に日本精神研究室、階上に登って、三年の裁縫、二部二年の修身、二部一年の心理、四年の國語の授業、生徒児童の成績品陳列場を御巡覽、階下に降つて、専攻科の物理科授業、更に附小校庭にて師範高女附小生徒児童の合同体操に御歩を留められ、郷土室を最後として」と記す。駆け足の巡覽であった。

②埼玉師範への差遣

埼玉師範への差遣に関連して、「百年史」は簡略に記すのみだが、埼玉大学教育学部所蔵の、表紙に「昭和九年十一月 勅使御差遣ニ關スル記録」と記された手書きの文書がある⁽⁹⁾。

内容は、小野直教諭「勅使御差遣ニ關スル記録」、井鍋秀雄教諭他二名「勅使御差遣ニ關スル記録 奉送迎係」、諸田啓三教諭他二名「接待係記録」、前田虎一郎教諭他一名「勅使御差遣ニ關スル寫真係記録」、庶務係萩原貞一教諭他二名「御使御差遣ニ關スル件」、竹野谷仁重教諭他三名「展覽會記録」である。これらにより御差遣の概要をまとめる。

●準備「昭和九年十一月」

- ・二日 県より勅使の差遣について通知
- ・三日 県知事より差遣について沙汰（指示）
- ・五日 差遣箇所、並びに所在地首長打合せ
- ・十一日 当日の予定表を知事に提出
- ・十四日 校内で各係による打合せ
- ・十四日十五日 大掃除
- ・十五日 会場設営、展覧会成績品等陳列（四時完了）

●当日「十六日」

- ・午前 正門前で、奉送迎予行演習
 - ・一〇時迄 親閲に参加しない上級生、武装で校門前整列（他学年は教室で授業）
 - ・一〇時一五分 勅使到着、奉迎
- 学校長の案内で休憩室へ

図9 女師への差遣（「蒼穹」五より）



図11 師範での授業参観



図10 師範への差遣（「鳳翔」三八より、図11も）



・一〇時一五分過ぎより一〇時四五分まで視察（時間は予定）

一 学校長、学校概要説明（三分）

一 一学年修身科授業参観（二分）

一 生徒学業成績品視察（一分）

一 三年生地理科授業参観（二分）

一 一年生手工科授業参観（二分）

一 四年生らの教練参観（四分）

一 寄宿舎参観（一分）

一 二年生理科授業参観（二分）

一 郷土館参観（二分）

一 附属小児童合同体操参観（二分）

一 附属小二年国語授業参観（一分）

・一〇時四〇分迄 授業終了後の生徒は制帽ゲートル着用で校門前に集合整列

・一〇時四五分 勅使出発、奉送

武装上級生は捧銃の礼、下級生は脱帽敬礼

・午後三時から四時 後始末

差遣の正式通知は一月二日だが、おそらくそれよりも前に、内々に予告はあり、準備に取りかかっていたものと思われる。

勅使の滞在は三〇分たらずであり、まさに分刻みのスケジュールで駆け足で行われた。このあと永積侍従は、埼玉女師・川口鑄物工場試験場・永瀬製鉄所・燃料研究所・南埼玉郡潮止村を回っている。さらに一七日にも、東吾野村経済更生・丸中織物株式会社・平仙レース工場を視察している。群馬県や栃木県においても

各所に差遣されており、天皇も過密スケジュールであったが、差遣の侍従も同様であった。視察した内容について、おそらく侍従の頭にはなにひとつ残らなかったであろう。

勅使の差遣は、視察して地方の実情を把握するというよりは、むしろ迎える側である学校等において、勅使に視察していただいたという恩恵光栄を感じるというのが主な目的だった。

小野「差遣記録」は次のように記す。

「此日ハ勅使御成ノ光栄ノ日デアル。舉校感激ニ充チ、恐懼・謹慎シ其ノ筋ノ指示ニ基キテ諸係ハ恪勤ノ誠ヲ致シ萬事遺漏ナキヲ期シ、只管御使ヲ御待チ申上ゲタノデアル。……此ノ優渥ナル□聖旨ニ感激シテ、光栄ヲ永久ニ傳ヘタルタメ具ニ事ヲ記シテ一冊ヲ作り、更ニ活動寫眞ニ収メルコトガ出来タ」。

「鳳翔」第三八号は、勅使差遣に関する生徒の文章を四篇収載する。三年の菅原幸男は次のように記す。

「御視察の間一二分であつたが掌に汗のにじんだのを後になつて漸く感じたのであります。斯く御視察なされたことが畏くも天聽に達するを思えば我々はただ感激の外はありません、陛下に於かせられては教育に御軫念遊ばされ、特に第二の國民を養成する初等教育に深く御心を用ひなされてゐるのであります。それ故その師表たるべき者を養成する師範學校に、特にわざわざ御勅使を御遣はしになられたのであります。このいやが上にも高き聖恩に對し奉り我々は特にこの深き御聖旨にこたえ奉る覺悟をかたくしたのであります。」

感激、光栄の語が繰り返されており、差遣の目的は達成されたことが分かる。

⑤一〇月二五日の朝香宮の台覧

鳳翔記光碑に「近衛師團長朝香宮鳩彦王殿下ノ台臨アリ」とある朝香宮の台覧についても、検討しておく。

「百年史」には「十月二十五日、近衛師団長朝香宮鳩彦王台覧」とのみ記す。この朝香宮台覧について記したものととして「昭和九年十月二十五日 近衛師團長朝香宮鳩彦王殿下臺臨ニ關スル記録」という手書きの文書がある⁽¹⁰⁾。

内容は、小野直教諭「朝香宮鳩彦王殿下本校台覧の記」（昭和九年十二月識）（以下「台覧の記」）、椎名好雄教諭他三名「朝香宮鳩彦王殿下奉送迎記録」、小野直他二名「接待係記録」、山下剛一教諭他二名「査閲展覽會記録」、小野直教諭「寄宿舎雜報」、吉田峯太郎配属将校中佐「教練課（附載、「講義資料」「昭和九年度教練査閲受閲計畫表」「昭和九年度教練査閲時ニ於ケル状況報告」）からなる。

吉田中佐の教練報告は、当時教練というものがどのような内容でどのようにして行われたかを知る上で興味深いが、ここでは教諭達が記した記録によりながら、宮の台覧について概観する。

a スケジュール

●準備

・台覧があることの指示があつた日付は不明。

（一〇月）

- ・二〇日 吉田中佐から説明、打ち合わせ
- ・二二日 接待係うちあわせ
- ・二三日 会議室等清掃
- ・二四日 接待者等健康診断、県衛生課による消毒、設営

午後六時、準備完了

・二五日

五時 生徒起床、校庭の排水作業（八時頃豪雨）

七時二〇分 排水作業終了

●台覧と査閲（二五日）

・八時二〇分頃 外部来校者来場

・午前八時三〇分・四〇分 全校生徒校門前に整列（武装）

・八時五五分 宮到着、奉迎（捧銃、喇叭による君が代吹奏）

拝謁、学校長による本校の説明

・九時二〇分 教練開始、教練状況報告・書類査閲

・九時四〇分 閱兵及び分列行進

・一〇時五分 吉田中佐による「軍事講話」台覧

・一〇時五〇分 教練関係成績品査閲

・一一時 附属小児童職員整列

・一一時五分 内庭にて、五年・二部一年による教練台覧

・一一時三五分 一年・二年による教練台覧

・一二時 教練終了、休憩室へ退室、附属小児童職員敬礼

休息室にて昼食予定も、料理作りが遅延

・一二時二五分 ようやく準備が整い昼食

・一二時四〇分 生徒整列

・一二時五〇分 食堂退室、一時休憩

・午後一時 宮帰還、一同送迎

三年による教練査閲官査閲

・一時二〇分 四年・二部一年による教練査閲官査閲

・二時 査閲官による所見開示

b 外部来校者

- ・ 朝香宮随従 御付武官山縣中佐、副見警察部長等
- ・ 軍部県警 査閲官飯沼守大佐、随官福島中尉等
- ・ 県官 飯沼知事等
- ・ 見学者 浦和高等學校配属将校岡鉄之助中佐等
- ・ 新聞社

c 成績品台覧

成績品は軍事教練に関わりの深いものが展示された。

「路上測図」「寫景図」「日常教練計画の一部」「平板測量器」「地形模型」「河川勾配図」「救急措置法の研究」「潜望鏡」「望遠鏡」「自動信号機模型」などである。

山下「査閲展覧会記録」には「わけても五年生の『平板測量器』、四年生の『潜望鏡』には特に御目を止めさせられ、親しく御手に取らせ給ひて御覽遊ばされたと承る」とあり、「特に査察官は後刻吉田教官を通じて『各教科の先生達が軍事思想に多大の関心を有せられ、生徒教導上にも斯る主旨より努力せらるることは感謝に堪えない』との謝辞があつた由である」と記す。

d 教練台覧

当日はあいにくの豪雨となり、内庭は泥濘み状態で迎えた。

碑文に「此ノ日、秋霖瀟瀟、衣帽ヲ霑スヲモ、意トシ給ハス、終始臨監アラセラレ」とあるように、降りしきる雨の中、緊急で用意した天幕も用いず、雨に濡れての台覧であつた。

「台覧の記」では、生徒達も「泥濘中躊躇することもなく身を投げ出し雄壮に活動する有様は見る者悉くに壮絶な威を起こせた」と記し、更に次のように続ける。

「漏れ承るところによれば、この日より以前に行われた東京高等師範学校の教練査閲御視察の折りには、同じく雨の中で攻防演習が行われたさうであるが、殿下の御目には我校のこの五年二部二年生の演習の方がよく止って「よく出来た」と仰せられたところとである。誠に光榮の極みである。」⁽¹¹⁾

図 12 台覧（「鳳翔」三八より、13・14 同様）



図 13 台覧



図14 児童整列敬礼



教練終了後のこととして、碑文は「特ニ嘉獎ノ辭ヲ賜ハル。舉校感激ス」と記す。これについて「台臨の記」は、査察終了後、集合した全生徒に対して述べた森少将の言葉を紹介する。

「本日は天候も運動場も頗る悪かったのですが、諸君は朝香師團長宮殿下の台臨を仰いでよくその全力を揚げられたのであります。……殿下がお帰りになられる時に、私に二つ申されました。一件は是非生徒に達せよと申されたのであります。それは

『天氣は悪かったが一同皆元氣でよくやった』

『師範生であるから一年生時分から指揮官助教助手としての動作を大いに励んだら余からう』

と申されました。」

森少将の言葉を聞き「この場に會合した職員生徒は勿論、査閲

官、縣當局関係、査閲參觀武官等もただただ一同恐惶感激した次第である」と記す。

● 参加者の言

「鳳翔」第三八号は、朝香宮台覽の教練について、六篇を載せる。五年本田直助の文。

「その日、十月二十五日はついに来ました。……一時の沛然たる雨は運動場を瞬時に泥海と化してしまつた。しかし、我等鳳翔健兒は『雨なにをか恐れんや一生に二度とない光榮の日であるぞ』と意氣天をつくばかりであつた。……あああれほどの感激、あれほどの緊張をもつて行つた教練が又とあつたろうか。……皇室の爲一身を捧げて身は戦場の露と消える勇士の今はの際に發する□天皇陛下萬歳の絶叫こそは、何れの日本人ももつ氣持ちから出た叫びにちがひない。……ただ我を忘れて全力をつくしたことは實に尊い氣持ちに達してゐたのである。これといふのも實に恐れ多い事ではありますが宮殿下の御前であるぞと赤誠を表したからである。」

(四) 明治一一年の行幸と鳳翔閣

碑文の「本校ハ、古ク鳳翔閣ト名ツケラレ」は、明治一一年の天皇行幸に際し、新築の師範学校校舎を行在所として提供し、鳳翔閣と名付けられたことを指す。埼玉師範が、天皇から恩恵を受ける「光榮」は、この鳳翔閣から始まつたというのである。

五―四 建碑の経緯と背景

(一) 建碑の経緯

次に「鳳翔記光碑」設立の経緯と背景について検討する。

昭和一〇年三月発行の「鳳翔」第三八号「本校便り」に「記念碑建設（計畫中）」として「本年度に於ける本校数々の光榮を永久に記念する爲に本校玄關側に記念碑を建つる事に決定。三月中旬までには建設する豫定なり」とある。

有元学校長が記す碑文撰文の日付は同年十一月一六日。

また「昭和十年十月十六日（土）父兄會記録」¹²に「附」として「紀光碑除幕式記録」「記念碑除幕式次第」がある。

光榮記念碑除幕式

昭和十年十一月十六日

式次第

- 一. 生徒附属児童（六年以上）並列
- 二. 來賓 高塚幾治郎氏參列
- 三. 一同敬礼
- 四. 神主祓ヲ行フ
- 五. 除幕 代表生徒ト児童トニテ
- 六. 一同敬礼
- 七. 式辞
- 八. 会頭高塚氏挨拶
- 九. 一同敬礼
- 十. 解散

これによると、同年の十一月一六日に、会頭の高塚幾郎氏を招いて「鳳翔記光碑」の除幕式が行われたようである。

さらに「埼玉県尋常師範学校 土地建物臺帳」（以下「土地建

物臺帳」¹³）に、埼玉県総務部長からの「土庶發第九三七號」「昭和十一年五月二十八日」として埼玉師範学校長あてに出した「貴校建造物トシテ別記ノ通り寄付受入相成候条御管理相成度」という文面の文書がある。別記は次の通り。

一. 建造物ノ所在地 浦和市

埼玉師範学校敷地内

一. 記念碑

壱基（名称「記光碑」行幸、御親閲、
勅使御差遣、朝香宮殿下台覽）

構造

碑石 仙台石 高七尺巾三尺厚四寸

台石 甲州石 高三尺巾五尺厚四尺

使用敷地 壱坪

見積價格 金壱百拾圓

以上昭和十一年五月二十日埼玉師範学校共攻會

ヨリ寄付受入

これによると昭和十一年五月に「記光碑」が共攻会から師範学校へ寄付されたことになる。

また先に見た小野の「勅使御差遣ニ關スル記録」には「此ノ光榮ニツイテハ、本校玄關左脇ノ記念碑モ之レヲ記シ」とある。

これらを総合すると、昭和一〇年三月には、石碑を建てることを決定し、同年十一月一六日までに完成、一六日に除幕式を行った。そして同一一年五月に至って、埼玉師範へ寄付されたというわけである。

石碑を作成して寄付したものについて、文書では「共攻會ヨリ」

とあるが、これはそのまま受け取ることはできない。共攻会とは、埼玉師範の生徒会にあたり、会誌「鳳翔」の発行と課外活動への支援を行うもので、生徒からの会費で運営されていた。経常経費でギリギリであり、別途石碑の見積価格「一一〇円」を支出できる余裕はなかった⁽¹⁴⁾。ではこの資金はどこから出たのか。

実は、共攻会から石碑が寄付されたのと時を同じくして、附属小学校保護者会から附属小学校へ「二宮尊徳立像」が寄付されている⁽¹⁵⁾。またこれに先立つ昭和八年七月三日付けで、埼玉県内務部長から埼玉師範学校長あてに二種類の寄付受入の通知が出ている⁽¹⁶⁾が、それは師範学校同窓会会頭高塚幾治郎から寄付の「御眞影奉安殿」と、故小島政吉頌徳会代表萩原貞一から寄付の「(小島政吉の) 胸像」であった。

これらの寄付は、資金力のある附属小保護者会、同窓会、頌徳会からなされている。「鳳翔記光碑」も、形式上は「共攻会から寄付」としながらも、実際にはOBや保護者から集められた資金でまかなわれたのではないか。

除幕式で来賓として呼ばれた高塚幾治郎会頭は、昭和八年の段階で同窓会会頭であった。おそらく除幕式も同窓会会頭としての招待であった⁽¹⁷⁾。この点も、「鳳翔記光碑」作成の背後に同窓会等があったことを裏付けるものであろう。

(二) 建碑の背景

①創立六十周年記念祝賀会と記念誌「光榮の六十年」

「鳳翔記光碑」建碑の背景について、推測を交えることになるが付言しておきたい。

建碑に先立つ、昭和八年五月、埼玉師範では、創立六十周年記念行事が三日間にわたって挙行された。一日目午前は、県知事福島繁三、文部大臣鳩山一郎(代理)、同窓会会頭高塚幾治郎らの祝辞による祝賀式、午後は二つの会場に分かれての祝賀会が盛大に開催され、二日目は、祝賀運動会・映画会・提灯行列、三日目は、講演と講談・落語などによる園遊会が開催された。会期中、県下の小中学校児童生徒の作品を展示する学芸展覧会が行われ、同窓会による故小島政吉校長の胸像除幕式も行われた。

この記念祝賀会は、埼玉師範の歴史と功績を派手にアピールする一大イベントであった。そしてこの時に作成され、参加者に配付されたと推測されるのが「創立祝賀 光榮の六十年」と題する冊子である⁽¹⁸⁾。

口絵に、三条公揮毫「鳳翔閣」の書と御眞影奉安殿・本校校舎の写真掲げる。本文は「本校の創立」「明治天皇の御駐輦」「森文部大臣と本校」「光榮の数々」「現在の校地校舎」「奉安殿の落成」「歴代の學校長」「生徒教養方針」「校訓の制定」「共攻會の活動」「競技の成績」「郷土教育の強調」「本校附属小學」「卒業生の活動」「本校の現在」からなる。本文一六頁の小冊子だが、埼玉師範の歴史と現在をコンパクトにまとめたものとなっている。

注目したいのは、タイトルの「光榮の六十年」と本文の「明治天皇の御駐輦」「光榮の数々」である。タイトルは、埼玉師範が光榮につつまれていることを意味しており、本文の二節は、その「光榮」とは、埼玉師範が天皇や皇族の来臨を賜ったことを指す。

つまり、創立六十周年記念祝賀会と埼玉師範栄光の歴史を記す出版物「光榮の六十年」は、天皇から特別の榮譽を与えられた学

校としての埼玉師範を強調するものであったと言えよう。

②鳳翔閣の復活とさらなる荘厳

さらに、記念行事の一環として、二つの額が埼玉師範玄関に掲げられた。「鳳翔」第三七号（昭和九（一九三四）年三月刊）「學校便り」は「六十周年記念式」の報告の後に「またこれも記念事業の一つとして玄関に教化風行文光奎照の大額が掲げられました。明治十一年當時埼玉縣令白根多助氏の書になり實に立派なもの……これと共に鳳翔閣の衝立を玄関入口へ立てました」と記す。後者の「鳳翔閣の衝立」の揮毫は、明治十一年、時の太政大臣三条実美の筆になるもので、鳳翔閣の名の由来となっているもの。どちらの額も、明治天皇の浦和行幸、埼玉師範行在所の折りに、鳳翔閣に掲げられていて、それ以後埼玉師範の榮譽を伝え続けてきたものである⁽¹⁹⁾。

そして昭和九年、改めてこの二つの額が埼玉師範に掲げられたことは、場所も建物も明治十一年の時とは異なるが、鹿島台の校舎が、天皇に関わりの深い「鳳翔閣」として復活したことを意味する。「鳳翔」は先の報告に続けて「職員生徒日々これを仰ぐときその崇高さにうたれて思はず身のひきしまるやうな感じが致します」と言う。この額は自ずと明治十一年の光榮を想起させるもので、その伝統を受け継ぎ、発展させることが自らの責務であると、埼玉師範の職員生徒に自覚させ続けているもののなのである。

そして鳳翔閣をさらなる高みにあげることとして、御真影奉安殿と小島政吉元学校長の胸像建立が行われる。御真影の拝礼は、多くの学校で行われていたが、それを守り安置するため、特別な、堅牢な施設物を建築したのである。小島は、埼玉師範中興の祖と

も言うべき存在であった。その像を作り、日々職員生徒が接すること、埼玉師範の努力と向上の歴史を実感し続けることになる。これらの荘厳により、埼玉師範鹿島台は、かつての鳳翔閣よりもさらに光榮を身にまとうことになる⁽²⁰⁾。

そして昭和九年の大演習・行幸において埼玉師範・女師は大きな役割を担い、さらなる光榮を得た。そこで、六十周年に渉る光榮の歴史の総決算として、「鳳翔記光碑」の建立が行われたのではない。

③有元九五郎学校長

ここで、「鳳翔記光碑」の撰者である有元九五郎について、振り返っておきたい。彼は、昭和七（一九三二）年三月、学校長として赴任し、右記の六十周年記念事業を推進する。「鳳翔記光碑」建設においても中心人物だったと見てよい。その有元は、実は明治三八年に起きた埼玉師範最大の学校紛擾事件において、そのただ中にある人物であった。

この事件は、生徒から寮の舎監の教員に対し「日露戦争開戦記念日を休校にして祝いたい」と申し入れたことから発する。翌日、その趣旨を文書で校長に提出し拒否されると、生徒側は当時の伊藤徳定校長が専制的で不親切であるとして全校生徒の連名で、県に對して校長の転任を願い出た。これを受けた当時の木下周知事は、「生徒として校長を排斥するが如きは以ての外」と願い出を拒否。生徒側は「文部当局に陳情」するため、二月九日に一斉に「同盟休校」に入る。これを聞いた木下周知事はさらに激怒し、校長に命じて生徒二三八名を無期停学処分とした。かくして混乱する事態の收拾に県会議長も乗り出すことになり、文部省から督

学官が派遣されて調査されるに至った。結果、ほとんどの生徒の停学は解かれたが、中心的な生徒六名は退学。一方学校側にも問題ありとして、学校長は依願免職、木下知事も左遷となった。

この大事件の発端である生徒の要求を受けたのが、赴任して三年目の若き有元舎監であった。彼は、事件の最初から最後までその渦中にあり、学校をめぐる厳しい状況を身を以て体験した。

埼玉師範はその後、新たに得た小島学校長の下、再建の道を歩んでゆくが、その復活事業のひとつに「行在所記念之碑」建立があった。「天皇の行幸を賜った」という光栄の再現として石碑が作られ、埼玉師範のこれからの進む道を示す道しるべの役割が期待されていた。有元自身は、事件直後に埼玉師範を離れ、小島の元で働いたわけではないが、紛擾事件の当事者として、事件の影響や小島等の奮闘ぶり、学校再建の様子を注視していたであろう。

そして、学校長として、再び埼玉師範に戻ってきた有元は、埼玉師範の栄光を振り返るべく、御真影奉安殿、故小島校長胸像、二宮尊徳像などを、学内教職員生徒のみならず、保護者・同窓生を巻き込む形で次々と建設していった。そして新たな光栄である昭和の大演習・行幸を直接の契機として、六十周年記念の一大イベントの総決算として、小島学校長が立てた「行在所記念之碑」と同様、埼玉師範の進むべき道を示す道しるべとして「鳳翔記光碑」を建立したのではないか。

注

(1) 拙稿「天皇の巡幸を契機とする埼玉県師範学校に関わる石碑について(その一)」「行在所記念之碑」と鳳翔閣」「埼玉大学紀要(教育学部)」

第七二巻第二号において「行在所記念之碑」を扱った。

(2) 埼玉縣『昭和九年陸軍特別大演習並地方行幸埼玉縣記録』(一九三六)(以下「大演習埼玉記録」)。

(3) 「鳳翔」第三七・三八号は埼玉県立熊谷図書館蔵。

(4) 「蒼穹」第五号は埼玉大学教育学部蔵。

(5) 原武史『可視化された帝国 近代日本の行啓幸』(みずす書房、二〇〇二)。

(6) 現在のさいたま市立常盤小学校。この学校は昭和五年から同四七年まで、現在の埼玉りそな銀行本店本部棟の位置にあった。

(7) 埼玉師範の教官は、学校長以下七名が「列立拝謁」であったが、浦和高等学校は、「単独拝謁」のトップに学校長がいたほか、四名の教授が「単独拝謁」、十一名の教授が「列立拝謁」であった。爵位が教員としての資格や能力を表しているわけではないが、このころは師範学校よりも高等学校の方が爵位の高い人物が配置されていたようである。

(8) 「鳳翔」第三八号有元学校長の巻頭言に次のようにいう。「勅使永積侍従には本校生徒附屬小學校兒童の授業を始めとし、諸般の設備施設並に寄宿舎に至るまで仔細に視察せられ、平素に於ける我校教授教育の實況を雲の上まで聞え上ぐる事を得たるは、學校長として光榮至極と感佩する。」

(9) 埼玉大学教育学部では、「百年史」作成後、散逸をまぬがれた文書類を整理し、「埼玉県師範学校文書」としてまとめ(文書は現在、教育学部事務倉庫2の壁面の棚に収録)、目録を作成した(新井淑子・在塚礼子「本学の歴史的資料を公開・活用できるような形にするための基礎的作業」(以下「歴史的資料基礎作業」平成一八(二〇〇六)年三月調。この目録は教育学部長室書棚)。内容が通じるものはひとつのボックスファイルにまとめ、ボックスファイル毎に、基本的に年代順に番号が振られている。アルバム

などは番号が無いが、番号が振られていないボックスファイルに、御差遣や宮の台覧に関する文書が収められている。この「無題」ボックスファイルに、勅使御差遣の文書がある。

(10) 差遣の記録と同様、「無題ボックスファイル」にある。

(11) 朝香宮の埼玉師範への評価が、東京高等師範学校におけるものよりも高かったと(勝手に?)想像して喜んでいる。

(12) 「歴史的資料基礎作業」No.60。

(13) 「歴史的資料基礎作業」No.10。表紙には「明治三十年十二月調」とあるが、明治三十一年から昭和一六年に至る土地建物関係の書類がひとつに綴じられている。

(14) 「鳳翔」第三十七号編集後記に「物價の騰貴と豫算の不足により原稿募集當時いろいろ奔走して折角書いてもらつた貴重な原稿のかなり多くのものを削減しなければなりませんでした」とあり、共攻会が資金不足に陥っていることを述べている。

(15) 「鳳翔記光碑」と同じ「土庶發第九三七號」別記。

(16) 「土地建物臺帳」綴込。

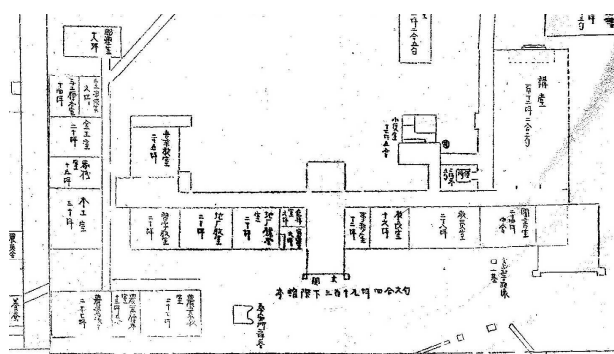
(17) 高塚幾治郎 こうづかいくじろう。明治二(一八六九)年から昭和一四(一九三九)年。北埼玉郡牛重村(現加須市)生。明治二三(一八九〇)年、埼玉師範卒業。教員生活に入り、北埼玉郡・秩父郡の各小学校を歴任。同三四(一九〇一)年、三三歳で北埼玉郡大桑尋常小学校訓導兼校長に抜擢されると、教授訓練の徹底をはかるとともに、村民の教化・融和にも力を注いだ。大桑小は、模範校として全国から参観者が訪れるまでになり、同四三年には文部大臣選奨校となった。入間郡視学・県視学を経て、大正七(一九一八)年に熊谷男子小学校長・熊谷商業学校長・熊谷町立図書館長を兼任、昭和三(一九二八)年まで在任した。大正一五(一九二六)

年には、全国に先駆けて県単位の小学校教員会を創設するなど教育制度の整備にも力を注ぎ、「埼玉教育の父」と呼ばれた。退任後、埼玉師範同窓会会頭となった。

(18) 「歴史的資料基礎作業」No.7。

(19) この二つの額については、拙稿、前掲注1。

(20) 昭和一六年九月一日付「学校平面圖ニ關スル件」(「土地建物臺帳」綴込)という文書に附載「学校平面圖」(下図)には、正門を入ってすぐ右手に「小島政吉像」、左手玄關より少し過ぎたところに「奉安所」が記入されている。



以上

謝辞

本稿作成にあたり、埼玉県立熊谷図書館、埼玉県立文書館、さいたま市浦和博物館、さいたま市立図書館、埼玉大学教育学部より資料提供や情報提供などを受けた。また、大東文化大学書道研究所客員研究員権田舜一氏、大東文化大学大学院生千葉圭亮氏、埼玉大学教養学部准教授西山尚志氏には、鳳翔記光碑の採択においてたいそうご協力いただいた。ここに記して御礼としたい。

(二〇一三年三月三十一日 提出)
(二〇一三年五月七日 受理)